

## 第8章 結 論

### 1. はじめに

本論文では、先行研究より選定した推量・可能性想定・否定判断・比況の四つのモダリティに含まれる副詞を対象として、明治期以降における各対象副詞自体の変遷および各対象副詞と共起する形式の変遷について考察してきた。

本章では、そのそれぞれの変遷および本論文で提示した共起モデルについてのまとめをしておきたいと思う。そして、今後の課題さらには本研究の展望についても述べ、本論文の締めくくりとしたい。

### 2. 本論文から得られた知見に関するまとめ

#### 2.1 対象副詞の使用傾向に関するまとめ

本論文では第3章から第6章にかけて、推量・可能性想定・否定判断・比況のモダリティを持つ副詞を対象に分析・考察を進めてきた。

第3章では、推量のモダリティ副詞を対象とし、オソラク、タブン、キット、サダメシの4語に関して分析・考察した。各対象副詞の出現傾向を見ると、全体的にはキットの使用率が高かった。また、タブンは特に現代期において多用されるようになったのに対し、サダメシは明治期では用いられていたものの戦後期以降はほとんど用例が見られなかった。また、地の文・会話文などへの使われ方の違いに関して見た場合、キットとサダメシは会話文に、オソラクは地の文に多く用いられていた。また、タブンは時代が下がると共に地の文での使用が増えているという傾向が認められた。オソラクとタブンについては、このような使用傾向の類似および意味的な面でも類似点が見出せたことなどから、今後競合が起こりうるということを述べた。

第4章では、可能性想定 of モダリティ副詞として、モシカスルト類、ヒョットスルト類、コトニヨルト類を対象とした。このうち、特に使用傾向に特徴的であったのはモシカスルト類が挙げられるであろう。モシカスルト類は、明治期まではその用例が見られず、モシカもしくはモシヤという形式でしか見られ

なかった。モシカスルト類という形式自体は、戦前期から現われ、その後普及していったと考えられる。このようなモシカスルト類の伸展とは対照的に、コトニヨルト類は時代を経るごとに使われなくなっていった副詞である。このような対照的な傾向を示すに至った要因としては、共起形式との関係の変化および命題の制約という点において、モシカスルト類の方が適応性が高かったということが考えられる。すなわち、いずれの点においても、モシカスルト類の方が用法の幅が広がったため使われやすく、その分普及していったものと考えられるのである。

第5章では、否定判断のモダリティ副詞として、マサカとヨモヤについて考察した。双方の副詞に関しては、マサカは明治期以降安定した用例数が得られたのに対して、ヨモヤは明治期では20例ほど見られたものの、それ以降ではほとんど用例が得られなかった。これら対照的な傾向を示すようになった要因については、本論文ではマサカの方が新鮮な印象があったためと推定したが、さらなる考察の余地も多分に残されている。

第6章では、比況のモダリティ副詞として、マルデ、アタカモ、サナガラの比況用法を中心に考察を進めた。明治期にはそれぞれの対象副詞に用例が見受けられたのだが、戦後期以降においてはマルデがほぼ100%近い比率を占めるようになっていた。この要因としては、マルデが地の文でも会話文でも用いられるようになった、つまりは使われる文に制約が無くなったということが考えられる。そして、その制約が無くなった理由としては、アタカモやサナガラが文(章)語であるという認識を持たれたことなどが絡み合っているためと推察された。

本論文で扱った対象副詞は、語数としては必ずしも多くはないが、それでも上に見てきたように、各モダリティ副詞の体系内においてさまざまな盛衰が見られたと言える。そして、特にこのような盛衰の過程は、あたかも同一のモダリティを持つ副詞群の中で、当該のモダリティを持つ副詞がある一つの副詞で代表されるかのような傾向(一モダリティー副詞の傾向)を見せていることに気づく。本論文では、このような傾向の根底には、「表現の論理化」を指向した流れ、すなわち「分析的傾向」によって、各モダリティ副詞の体系内で整理化が行なわれているものと推察した。

推量のモダリティ副詞におけるオソラクとタブン、また可能性想定のもダリティ副詞におけるモシカスルト類とヒョットスルト類など、まだ一語に収束していない場合もあるが、これらも今後一語に収束していく可能性は十分に考えられるのである。以上のことは、第7章3節において述べた。

## 2.2 対象副詞と共起形式に関するまとめ

対象副詞と共起形式の変遷について、まとめておこう。

第3章では、推量のモダリティ副詞オソラク、タブン、キット、サダメシを扱った。まずオソラクとタブンは、明治期には主にダロウ・マイといった推量のモダリティ形式と共起していたが、時代が下るにつれ、判断のモダリティ形式のニ違イナイや断定のモダリティ形式ダ・活用形などの推量以外のモダリティ形式とも共起するようになっていったことがわかった。このような現象の要因として、オソラクやタブンに推量のモダリティがやきついたということが考えられる。それゆえ、他のモダリティ形式を共起させても推量のニュアンスは保たれるので、共起するモダリティ（形式）に拡がり生まれたのであらうと推定した。これに対し、キットは明治期よりすでに複数のモダリティ形式と共起しており、それは現代にまで至っている。また、サダメシは、明治期に限って見てみると、ダロウと共起していた例が3割強を占め、それ以外の用例でも推量のモダリティ形式（「推量該当表現」）と共起していることから、共起形式は推量のモダリティに関連したものであったことがうかがえる。

第4章では、可能性判断のモダリティ副詞モシカスルト類、ヒョットスルト類、コトニヨルト類を対象にしたが、いずれも可能性想定のもダリティ形式カモシレナイとの共起が中心的であった。また、モシカスルト類とヒョットスルト類においては、同じく可能性想定のもダリティ形式（ノ）デハナイカが、カモシレナイに準じて高い比率を示した。

モシカスルト類は、明治期においてはモシカ・モシヤという形式で出現していたということは、すでに本章2.1で述べたが、共起形式に関しても違いが見られた。モシカ・モシヤは、その共起形式の多くが（ノ）デハナイカおよびカを含む形式（「その他のカ類」）であり、カモシレナイは1例しか得られなかった。このような共起形式の変化（およびその定着）が、モシカスルト類がモ

シカ・モシヤおよびコトニヨルト類を凌駕していった証左とも考えられる（第4章6節参照）。

第5章は、否定判断のモダリティ副詞マサカとヨモヤに関して述べた。マサカは、明治期にはマイやナイダロウ類などの否定判断のモダリティ形式と多く共起していたが、時代が下るにつれ、具体的なモダリティ形式をさせずに、一語文や言いさしで用いられるようになっていった。このような現象に至った要因として、本論文ではマサカに否定判断のモダリティがやきついたことの反映と考えたが、ここでのやきつけられ方は先のオソラクやタブンほどは強くはないと考えられる（第5章3.3.3参照）。また、ヨモヤは主にマイと共起する傾向が高かった。

第6章は、比況のモダリティ副詞として、マルデ、アタカモ、サナガラを取り上げた。マルデの共起形式としては、ヨウダが全時期を通じて7割前後を占め、ミタイダも戦前期以降13から18%程度を占めるようになっていった。これに対し、アタカモやサナガラは、どちらも明治期・戦前期において比較的用例数が見られたが、そこではヨウダと共にゴトシという共起形式も多く見られた。このゴトシは文章語的な認識を持たれていたようであり、それを共起させるアタカモやサナガラも、文章語的といった印象を持たれたことは想像に難くない。それゆえ、相対的に新しい印象を持つマルデが広く使用されるようになっていったと思われる。

以上のように、共起形式の変化は、副詞（の使用）にも影響を与えうるということがうかがえる。

## 2.3 共起モデルに関するまとめ

本論文は、明治期以降の小説の用例より、モダリティ副詞とその共起形式の変遷について考察したものである。そして、その得られた共起形式の用例数より、二つのモデルを提唱した。

一つは、出現した共起形式の用例数の多寡に注目したモデルとして「量的共起モデル」を設定した。これは、用例の多い共起形式が当該のモダリティ副詞の共起形式であると見なす立場からのモデルであり、いわば形式的・構文的な面に注目したモデルであるとも言える。本論文の結果では、この共起モデルと

して設定できたのは、＜累加型・漸減型・共立型・専立型＞の四つのモデルであった。これらの相互の関係については、累加型・漸減型・共立型の三つの型は、共立型を中心に累加型および漸減型の双方向に働きあっていると考えられる。また、専立型は共立型の対立的な型と言え、累加型および漸減型と一方的な関係にあると考えられる。これらに関する詳細は第7章4.2において述べた。

もう一つのモデルは、出現した共起形式がどのようなモダリティに該当するかといった、いわば意味的な面に注目したモデルとして「質的共起モデル」を提示した。これには、同一のモダリティに含まれる（複数の）形式と共起するといった＜単一モダリティ共起型＞と、共起形式が複数あり、それが複数のモダリティにわたっている＜複数モダリティ共起型＞の二つを設定した。これらの相互の関係は、「共起形式の制約」という点において、複数モダリティ共起型の方が単一モダリティ共起型よりも制約が小さく、その分モダリティが当該のモダリティ副詞にやきついていると考えられる。その点で、複数モダリティ共起型の副詞は、文字通り「モダリティ副詞」と呼ぶにふさわしく、逆に単一モダリティ共起型の副詞は、「準モダリティ副詞」と呼びうるものであることを指摘した。以上のことは、第7章4.1で述べた。

各対象副詞が、それぞれのモデルのどの型に該当するのかは、各章のまとめ、および第7章2節でまとめておいたので、あえてここでは再提示はしない。

### 3. 本研究の今後の発展性に関する展望

本論文の最後として、本研究の展望および本論文では扱いきれなかった今後の課題について述べておきたい。

本論文での前提となる考え方については、第1章1節で述べた。そこでは、本研究の目標が複数の言語変化に関する事象を統一的に解釈できるような規則を構築するということであった。そして、本論文では、できる限りその第一段階になりうるようなモデルを提示し、そのモデル間での関連についても考察することを目的として掲げた。

本論文では、「共起モデル」として、四つの量的モデルおよび二つの質的モデルを帰納的に導き出すことができた。このようなモデルが、それぞれこの数だけであるのかどうかについては今後の研究をまたなければならないが、この

ようなモデルを端緒に、まずはモダリティ副詞をはじめとする副詞に関して、網羅的に研究の対象とすることができるであろう。

さらに、本論文で提案した量的／質的共起モデルを応用することにより、さまざまな言語（変化）に関わる事象を量的／質的な側面から捉え直すことができであろう。それは、ひいては言語変化の原因や変遷過程などを解明する新たな視座となりうる可能性を秘めているように思われる。

そのような視点に立てば、本研究は、さらに大きな枠組みとして、日本語表現の変遷史研究として位置づけることもできよう。特に、本論文での知見は、近現代における日本語表現の、いわば“あり方”とでも言ったものの変遷を解明する上で有効な要件になると考えられる。

このような近現代における日本語表現のあり方とは、日本語表現の“一語一義化[\*1]”を志向した改革に伴う、できるだけ文字通りに解釈できるような表現として存在することという意味である。

この“一語一義化”を志向した改革とは、たとえば、日本は明治維新より、近代統一国家としての「日本」を構築するために、バラエティに富んだ日本語すなわち方言ではなく、すべての日本人に通じるような日本語すなわち標準語（共通語）を確立・浸透させようとしたこと（岩淵悦太郎ほか1958，松村明1998，鈴木義里2003）や、教育の普及を目的とした中で発達した口語文や言文一致の流れ（佐藤喜代治1958，松村明1998）などが挙げられる[\*2]。さらに、このような志向は戦争後の日本においても本質的には変化しなかったと考えられる[\*3]。

---

[\*1] 松本健一(2003)には、「近代日本語の特徴は、一つの言葉の意味を一つの漢字で表し、そしてそれを英語に翻訳すればそのまま一義的な意味を持つ、ということになる。」とある。ただし、本文での「一語一義化」は、松本の意味よりも広く定め、「一つのことばの意味を一つのことばで表わす」という意味で用いる。

[\*2] 他に、亀井孝ほか編(1965)，杉本つとむ(1981)，真田信治(1991)，進藤咲子(2003)，松本健一(2003)なども参照。また日本語（国語）政策論の視点より、小森陽一(2000)，中山昭彦(2001)，安田敏朗(2001)なども参考になる。

[\*3] 鈴木義里(2003：48)は、以下のように述べる。

さて、自由意志かどうかは別にして、戦後の改革の中で、社会制度は大きく変貌を遂げた。その中で日本語も当然のことながら、変貌を遂げることになった。だが、明治以降進んできた「国民」を統合する均質な「国語」という流れに、本質的な変化を加えたようには見えない。

そして、そのような改革に伴う「できるだけ文字通りに解釈できるような表現として存在すること」とは、中村通夫(1955)の「明晰への要求」、渋谷勝己(1991)の「論理関係の明示化」に通ずるものであると言える[\*4]。

そのような日本語表現への志向を反映した流れの中で、その一例として、本論文で見られたような「一モダリティー副詞」のような傾向や共起の型の変遷などが起こったのだとも言える。

このように、本研究は、単に近現代日本語文法の変遷という枠だけに止まらず、近現代の日本語表現(史)研究の中に位置づけられるものであるとも言える点で、非常に有益なものであると考えられる。

しかし、残された課題も多く残されていると思われる。いくつか挙げておこう。まず、本論文では大衆文学を対象とした。当然、日本語にまつわる事象は、これ以外の多方面に及ぶ。純文学、新聞、評論、さらには発話資料など多角的である。それらを捨象して、大衆文学の結果のみからモデルを構築するのは、必ずしもその妥当性、正当性は十分とは言い切れない。したがって、今後、これらさまざまな言語資料を用いて、モデルの妥当性、正当性について検証・検討していかねばならず、その点で課題は多いと言える。

また、本論文は、歴史言語学的なアプローチに主眼をおいた分析・考察が中心となり、社会言語学的な側面からの分析や考察はほとんど行なえなかった。本論文で扱ったモダリティー副詞と共起形式の関係の変遷について、日本語使用者の位相とは関連があるのか、または方言からの影響はあるのかなど、まだ考察すべき側面は多く残されており、それらも今後究明していく必要がある。

---

[\*4] 中村通夫(1955)は、「<現代日本語は；筆者注>以心伝心、その場面だけにたよって文字・音だけにたよることの少なかった前代のことばにくらべて、文字表記そのもので、また場面を大きな支えとしないで音連結を聞いただけで理解されるようにと志向する傾向が強い」ことを指して、「明晰への要求」と呼んでいる。また、渋谷勝己(1991)は、太平洋戦争後の日本語の変化の一つとして「論理関係の明示化」を指摘しているが、この変化も「明晰への要求」と根本的な点では軌を一にしていると思われる。

なお、亀井孝ほか編(1965: 165-164)には、このような日本語の論理化が明治時代の欧文構造(の翻訳)の影響を受けている可能性がある旨の指摘が見られる。